

國學院大學學術情報リポジトリ

養育者のニーズにこたえる「子育て講座」の検討：
効果測定尺度を用いての分析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 幸子, 藤原, 義博, 田尻, 由起 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001344

〔研究ノート〕

養育者のニーズにこたえる「子育て講座」の検討

—効果測定尺度を用いての分析から—

高橋 幸子 藤原 義博 田尻 由起

【要旨】

子育て中の養育者支援は障害のあるなしにかかわらず喫緊の課題である。まして、障害のある乳幼児を育てる保護者は、通常の子育て以上にストレスや不安を抱え、適切な支援を必要としている。「子育て講座」は子育て支援方策の一つとして各地で取り組まれており、その成果も報告されている。そこで、超早期段階にある知的・重複・発達障害児への教育的支援の一つとして実施した特別支援学校幼稚部における「子育て支援講座」について、受講者へのアンケートをもとにその評価検証を行った。子育てに向き合う気持ちを整理し、子ども理解を深め、今後の行動や態度について前向きな姿勢を示す意見が多数みられるなど一定の効果が見られたとともに、ニーズに合致した講座の在り方が課題となった。今後は超早期段階の障害児の養育者のニーズを精査して学習機会を設け、さらに有益な教育的支援につないでいく必要があることが明らかになった。

【キーワード】

子育て支援 超早期段階 障害乳幼児 子育て講座

1. はじめに

子育て中の養育者支援は障害のあるなしにかかわらず喫緊の課題である。1994年の「エンゼルプラン」以降、国は様々な施策や行動指針を打ち出し、地方自治体に対し子育ての不安や孤立感を解消するさまざまな手立てを要請した。「地域子育て支援センターの整備」などもその一つであり、その後の「次世代育成支援対策推進法」策定の過程では、「つどいの広場」事業を中心に「地域子育て支援拠点事業」が推奨されるとともに、家庭教育の支援の充実をめざした「子育て講座」の開催や子育て情報の提供が施策として挙げられた。（厚生労働省HP）

学習機会の保障としての「子育て講座」は情報交換や地域の組織化、仲間づくりにつながり、子育ての負担を軽減する役割を担うことが確認されている。杉野（2010）は、東京都国立市子ども家庭支援センターでの「地域子育て講座」の取組を紹介し、「子育て支援講座」は「孤立しがちな子育て中の親たちのため、地域で情報交換・交流などの活動の場を与え、仲間づくりを進めること」が目的であり、関係づくりのためにはそれぞれのニーズ把握とコーディネートが重要で

あることを指摘している。神田（2012）は、就学前の保護者を対象に家庭の教育力を高めることをねらった「家庭教育講座」の実践において、しつけや関わりについて学んだ受講者が「子育てや子供の成長に関する情報や知識が増えた」と感想を述べている点を取り上げ、学習効果があったとしている。佐野・池田（2015）、笹瀬（2016）は、アンケート調査を通して「子育て講座」が子ども理解や育児不安の軽減、心のゆとりにつながり、「養育力の向上」につながったとみている。

そのほか、企業における子育て講座の実践（金山2006）や保育者養成機関における子育て支援講座の実践（広瀬2011）について評価検証した報告もあり、「子育て講座」が子育て支援の取組として有効であることが確かめられている。一方、倉石（2010）は、「子育て講座」の効果について「親自身の変容や親子関係の改善といった指標による検証が実質的に行われることの困難さ」を指摘し、効果測定のための尺度を提案した。

また、障害のある乳幼児を育てる保護者が、通常の子育て以上にストレスや不安を抱え、適切な支援を求めていることは明らかである。小林（2008）は、「ストレス」「障害受容」「ソーシャルサポート」の観点からの文献研究を通して「保護者の状況理解リスト」を作成し、保護者アセスメントを通じた有効な保護者支援の在り方を提起している。併せて、保護者の状況により求めるサポートの内容が異なることやフォーマルな支援の機能との関係性に着目した。小林によれば、「保護者の主体的な活動を支えたりしながら、適切な情報を時機をみて提供していく」ことが保護者の障害受容に影響を与えるとされる。

2010（平成22）年12月に公表された「特別支援教育の在り方に関する特別委員会 論点整理」（中央教育審議会初等中等教育分科会）においては、「専門的な教育が受けられる体制を医療・教育・福祉の連携の下に早急に確立することが必要」、そのことで「高い教育的効果が期待できる」としている。多様なニーズに応え乳幼児から見通しをもった支援システムを構築することが重要であり、就学前期に保護者がわが子の障害を理解し子育てに向き合うことが、学齢期への円滑な移行につながるのはあきらかである。宮田（2009）は、この時期の特殊性として「保護者の気づきがなければ支援がスタートできない」とし、広い概念として「発達支援」を上げ「障害が確定していない子ども達への育児支援を中心とした支援」の重要性を指摘し、地域での重層的支援システムに言及している。

概観したように「子育て講座」については情報交換や地域の組織化、仲間づくりにつながり、子育ての負担を軽減する役割を担うことが確認されている（杉野,2010笹瀬,2012 倉石,2010等）。「子育て講座」はすでに各地の支援システムにおいて、フォーマルな支援の一つとして実施されており、障害のある乳幼児を育てる保護者に対し早期に適切な情報提供を行う機会となって保護者の障害の理解や受容につながるものと位置づいている。障害のある乳幼児の保護者にとって通常の「子育て講座」同様の成果が見られるか、その有効性を確かめることが求められる。本研究においては、超早期段階にある知的・重複・発達障害児への支援の取組^{注1}において、特別支援

学校幼稚部が開催した「子育て講座」について、その有効性を検証し、超早期段階の教育的支援の課題について検討するものである。

2. 方法

A特別支援学校幼稚部で開催された「子育て応援団『連続講座』」（以下「子育て講座」）について、受講者に行った質問紙調査を分析する。

（１）講座のねらい 子育ての不安を軽減し発達を促す包括的な子育て方法及び障害の正しい理解を促進すること。

（２）講座の開催：201X年 9月～12月 計4回実施。

201X年度の講座は、前年度の講座開催時の希望調査に基づき、テーマ設定がなされた。

前年度の希望内容として記述されたのは、表1のとおりである。（藤原2016）

表1 今後の希望（講座の内容について）原文ママ

- ・ 障害児を兄弟姉妹に持つ子の心と支援の仕方
- ・ 障害があるきょうだい児の育て方、配慮すべきこと
- ・ ASDやアスペルガー症候群のことについて、詳しく知りたい、支援方法やその子どもを持つ親への支援の仕方など。
- ・ 課題一つ一つのねらいや目標を達成するまでの段階がわかる講習
- ・ 問題行動の対処の仕方、子どもとのコミュニケーション、意思疎通の方法、叱り方、してほしくないことからしてほしいことへの促し
- ・ 自閉症の子どもへの接し方、育て方
- ・ 子どもの年齢に応じた心理と接し方
- ・ 学童期の子どもがひとりで行動できるようになるための工夫（構造化）や見通しをつけやすくなる道具や方法について
- ・ 成長との関わり方
- ・ 健常者の子育てについて教えてほしい。叱り方ほめ方など
- ・ 身辺自立の指導のポイント
- ・ 学童期に大切にしたいこと
- ・ 摂食指導について（食形態や姿勢、環境など）小学校を迎える前の話（必要なこと）
- ・ 親亡き後の一人っ子の子ども（知的障害がある）のために、今からできること、備えられること
- ・ 職場実習の話を詳しく聞きたいと思いました（事前事後も含めて）
- ・ 子どもそれぞれのいやいやの事例と、成長したらどう変わっていったのかを聞いてみたい
- ・ 障がい児の保護者の不安等によりそえる内容、職員の役割
- ・ 障がい児を子にもつ親の気持ちと共生について、健常児の親は何かができるかといった内容のもの
- ・ インクルーシブ教育の実態について、放課後事業の実態と展望について
- ・ 支援者、保護者の方両方に大変勉強になるものでしたが、もし可能なら教育者向けのものがあるとありがたいです。
- ・ 紙芝居のお話が聞きたい

ニーズアンケート（表1）から抽出された三つのニーズ①支援方法②客観的な知識③啓蒙に対応して201X年度の講座内容を検討した結果、表2の講座内容が計画された。

表2 各回の講座内容

	講師	講座タイトル
第1回	保護者当事者	たかがキョウダイ、されどキョウダイ～個性豊かなきょうだいを育てる
第2回	療育機関心理士	家族の“今”を大切に～上手に育児ストレスと向き合うために
第3回	特別支援学校教師	乳幼児期から考えておこう！インクルーシブ教育って何？
第4回	小児科医	乳幼児期の子どもの向き合い～将来のためではなく、今を大切にそれが将来につながります～

（3）対象：4回の講座参加者 計93名

各回の講座参加者の内訳は表3のとおりである。

表3 連続講座参加者の内訳

	第1回	第2回	第3回	第4回	合計
保護者	17名	11名	20名	25名	73名
関係者	5名	5名	2名	8名	20名
合計	22名	16名	22名	33名	93名

*事前申込で、支援機関所属を記入した方を「関係者」としている。

（4）調査項目（ ）は質問項目ラベル

- 問1 この講座の内容は、子育て（仕事）で、活用したい内容であった（子育てでの活用可能性）
- 問2 この講座の内容は、理解できるものであった（わかりやすさ）
- 問3 この講座の内容は、子育てや仕事の不安や悩みを解決するのに役立った（不安や悩みの解消との関連）
- 問4 この講座は、参加目的やご自身のニーズに合ったものであった（ニーズ合致度）
- 問5 この講座は満足するものであった（満足度について）

5件法での評価と自由記述で回答

（5）分析方法

分析1）講座ごとの5件法での評価を数量比較し、それらの自由記述から前年度のアンケートで得られたニーズとの関連性について検討する。

分析2）自由記述を文章、文節、単語の内容を「講座の効果測定尺度開発」における項目（倉石,2010）にコーディングし分類、集計し、講座の効果測定を試行する。

3. 結果

アンケート調査を実施した結果、質問紙の回収は計83名であり、回収率は90%であった。結果は下記のとおりである。

表4 回答者の内訳（記入された属性）

	第1回	第2回	第3回	第4回	合計
保護者	13名	12名	18名	24名	67名
関係者	4名	2名	2名	4名	12名
保護者/関係者	2名	1名	0名	0名	3名
不明	0名	0名	1名	0名	1名
合計	19名	15名	21名	28名	83名

*保護者/関係者は、保護者であり支援機関の職員でもあるという方

分析1) 各講座のテーマとその評価

各回の講座のテーマと各質問項目の評価は、図1のとおりである。

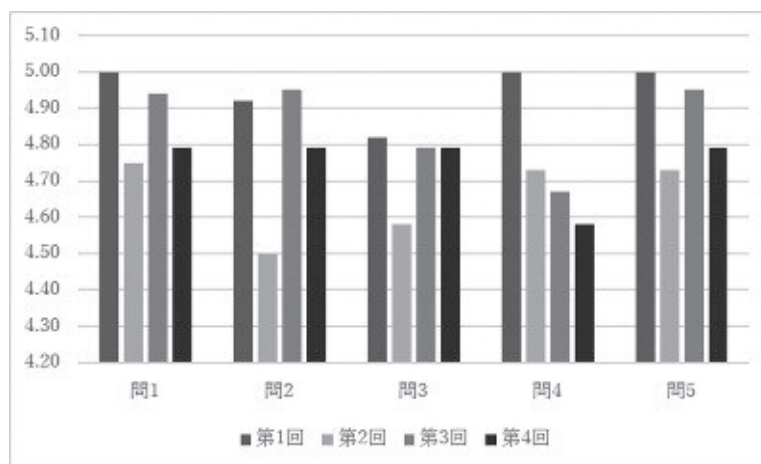


図1 各講座のテーマと評価の関連性

多少のばらつきはあるものの、アンケートの評価はどの項目も4.5以上を示し、概ね好評であることがうかがえる。今回の講座については事前にニーズ調査を行ったが、ニーズアンケート調査の回答者と今回の受講者はほとんど重なっていない。ニーズ調査の結果をもとにテーマ設定を行ったが、受講者のニーズを直接反映させたものではなく、低い評価をした意見の中には、「話が偏っている」や「講座タイトルと内容が別物」「もう少し違う話を」等の意見が見られた。

第1回は障害児の母親が講師であったが、どの問いについてもおおむね高評価であった。「きょ

うだい」をテーマに自らの子育てについて語っていただいたが、お子さんはすでに成人し自立しており、様々なエピソードの振り返りがあった。「今、何を・・・を考えている日々でしたが、少し見えてきた気がします」「何年か後の我が家のことのイメージが少しわいた」等、自分の身に置き換えての感想が目立った。各項目の自由記述については表5のとおりである。

表5 アンケートの自由記述（抜粋）

第1回 「たかがキョウダイ、されどキョウダイ～個性豊かなきょうだいを育てる」

- ・当該児の生活圏が変わった時、健常の兄弟児にも、その環境を見せる、どういうところできょうだいが活動するのか（しているのか）を知ってもらおう。この先、進学や社会へ出る等で生活圏が変わってきますので（子育てでの活用可能性）
- ・障害のある子を持っているわけではないのですが、子育てに悩んでいました。お話を聞いて自分の視界が開けた気がしました。（わかりやすさ）
- ・障害のある姉を弟の送迎に連れて行くのも迷いながら過ごしておりましたが、私個人の悩み不安が解消されました。（不安や悩みの解消との関連）
- ・同じような生き方は難しいが、少しでも見習って強くたくましいお母さんになってわが子を育てていけたらと思いました。（ニーズ合致度）
- ・どのような子育てにも共通する、とても良いお話を伺うことができました。（満足度について）

第2回 「家族の“今”を大切に～上手に育児ストレスと向き合うために」

- ・自分が休むことを後回しにしてきましたが、大切なことだと気づきました。（子育てでの活用可能性）
- ・私自身の体験と重なる部分と「ああ、そう感じる方もいらっしゃるのだ」という気持ちと大変考えさせていただいたひと時でございます。（わかりやすさ）
- ・毎日、イライラしてしまうのが悩みでした。反省会を開くのはもうやめようと思いました。頑張っても自分の欠点が目につき、子どもを産む前のように自分を好きになれませんでした。自分のことを大切にしようと思えました。（不安や悩みの解消との関連）
- ・どの内容も、今の自分にとって必要なお話でした。不安でいましたが、今の幸せに気付いていきたいです。（ニーズ合致度）
- ・もっと深く具体的な方法を知りたいこともあった。（満足度について）

第3回 「乳幼児期から考えておこう！インクルーシブ教育って何？」

- ・自我の拡大と自立性の育ちに合わせて、大人の都合で接しないようにしたい。（子育てでの活用可能性）
- ・「障害から非定型発達へ」「時代のキーワードは当事者（本人）」、とても分かりやすく、理解しやすかったです。（わかりやすさ）
- ・定型（兄）非定型（弟）二人を育てているので、基本は同じというのは納得できた（不安や悩みの解消との関連）
- ・どうしていけばいいか不安でしたが、背中を押していただけた気がしました。（ニーズ合致度）
- ・精一杯の子育てをしておりますが、工夫したり環境を変えたり、プラスの関係性を気づく努力がまだまだであり、もっともっと私にできることがあると気づきました。大満足です。（満足度について）
- ・ダウン症の弟のみならず、定型発達の兄にも当てはまる内容でよかった。（満足度について）

第4回 「乳幼児期の子どもとの向き合い～将来のためではなく今を大切に それが将来につながります～」

- ・今日一日が終わるとき「今日が楽しかった」といえる日をたくさん作る。シンプルだけど、すごく納得できました。（子育てでの活用可能性）
- ・「当たり前」これが一番大きな壁でした。焦りがありました。子供の成長は人それぞれ。わかっていながら行動できておりませんでした。（わかりやすさ）
- ・「20歳になった時に情緒が安定するかどうか」は私も常に考えていたことでした。（不安や悩みの解消との関連）
- ・子どもがこんな風なのは私のしつけが悪いと夫に言われて悩んでいましたが、そうではないとお話を聞いて少し安心しました。（不安や悩みの解消との関連）
- ・乳幼児期というテーマでしたが、小学生以降にも必要な情報が多かったと思いました。（ニーズ合致度）
- ・もっともっと違うお話も聞きたいと思いました。本質的な深いところのことをおっしゃっていて、目が覚める思いでした。（満足度について）

分析2) アンケートの自由記述について、質的分析を行った。尺度項目は、倉石（2010）を参照した。使用した項目と記述内容例は表6の通りである。

表6 項目と具体的記述の例

項目	コーディングの記述例
親の自分自身に対する認識の変化	自己に関する肯定的認識 我が家の幸せ探していこう 前向きな気持ちになれた 自分のことを大切にしよう 今日から子育てをもっと楽しもう 家族全員での大事なルールなど、目的、目標ができた 今日帰ってから子どもと一緒に成長しよう
	時間の流れに関する認知 新しい発見 休むことを後回しにしない どんな育児にもゴールがある 時間の共有 「今を楽しむ」ことが大切というのが心に響いた
	自分の気持ちの整理 子育てを軽く考えたくなった 上の子にどう向き合おうか悩んでいた 心のリフレッシュになった 肩の荷が下りた感じ どうしていいかわからなかったが、背中を押してもらえた
	自責の念 イライラしていた 頑張っても自分の欠点が目についた 視野が狭くなり、目の前のことに細かく反応し疲れていた 私のしつけが悪いと悩んでいた できていない部分が多かった
	感情のコントロール 日々の生活のモヤモヤがわかった 自分の感情をコントロールできない時があった わかっていながら行動できない 自分の感情と頭の理解があることで冷静になれそうです
	心理的不安定さ つい目の前の不安に目を向けてしまう 焦りがありました 何とかなると思えるようになった
	幼少期への原因帰属 幼いころ、気持ちを聞いてくれる人も機関もなかった
	対人関係に関する認知 友達に教えてあげる 私も何かできることがあるかもしれない
親の子どもに対する認識の変化	子どもの立場に立つこと 子どものもどかしさがわかった 子供の成長は人それぞれ 話が通じにくい時もある 注意されると反発 当たり前のことがわからない 障害の特性、特徴が分かった 自己選択の力がわかった 人それぞれの進み方がある 伝わらない時は理解することが難しい内容だった トイレトレーニングで子どもの育ちについて理解できてよかった。
	子どもに対する情緒 共感できた 子どもの良い点を見つめたい 子どもが大泣き・・追いつめてしまった 何もしなくても一緒に時を過ごすだけでも良い
	子どもに対する態度 もう少し違った伝え方があるかもしれない 子どもがぐずぐずしているとき何を求めているか汲み取りたい 大人の都合で接しないようにしたい 工夫したり環境を変えたり、プラスの関係性を築く 本人の気持ちを第一に考えるようにする
	子どもに対する行動 実践しようと思った 今の生活に生かせる 障害のある息子にすごしやすい環境を作りたい

コーディングの作業は2名で行い、一致率は82%であった。調整してコーディングした項目数は204であった。一つの文章に複数の異なる項目要素が入っている場合は複数カウントしている。また、一つの文章に同じ項目要素が複数入っている場合は1カウントとした。「子どもに対する態度」と「子どもに対する行動」の分類については、具体的な行動内容が表記されているものを「子どもに対する行動」に振り分け、姿勢を示すものを「子どもに対する態度」に振り分けた。

集計した結果、「自己を肯定する」「自分の気持ちが整理できた」という点に言及している記述が全記述数の4割以上（43.1%）を占めた。「子どもの立場に立つこと」や「子どもに対する態度」に関する記述も併せて28%あり、具体的には「（子どもに）伝わらないときは難しい内容だった」「子どもがぐずぐずしているとき、何を求めているか（考えたい）」と子どもの立場に思いをはせ「事前に知らせること」「自己選択の機会を持つ」「環境を工夫する」等、対応への記述が見られた。各講座と効果測定の結果は図2の通りである。

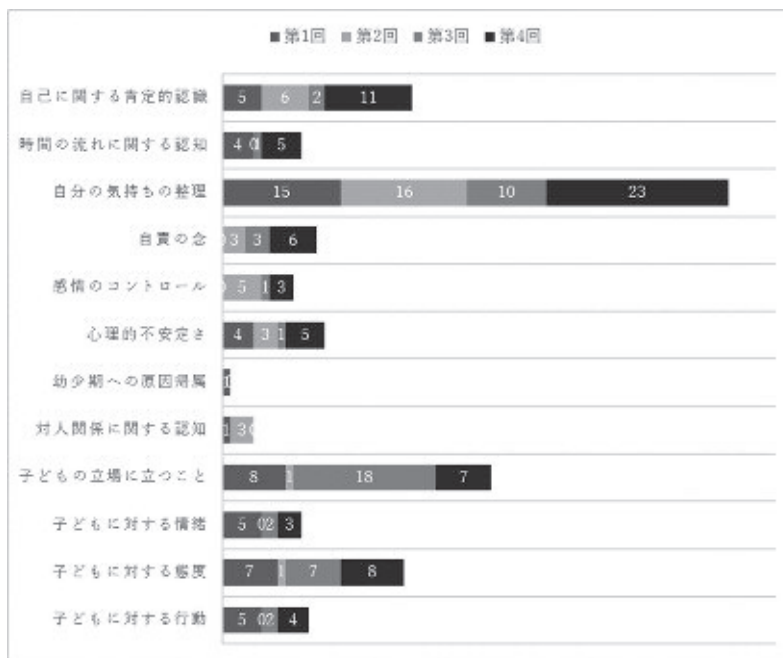


図2 自由記述から見る講座の効果

4. 考察と今後の課題

本稿は、「子育て講座」について、その有効性を検証し、超早期段階の教育的支援の課題について検討することをねらいとし、実際に行った「子育て講座」の参加者アンケートを分析したものである。

分析1の結果に見るように、講座のテーマや内容と受講者の受け止め（評価）に関連があるこ

とが示された。「子育て講座」は受講者のニーズとの適合度で評価が分かれる。講座企画者であるスタッフからは、「第1回、第2回は具体的な支援方法、というニーズであった。自由記述の具体的な記述内容は違うとしても、大枠としてニーズに沿った（中略）。第3回のニーズは啓蒙であった。乳幼児期の子どもの発達を概観しながら、定型・非定型発達に沿っての説明をし、本校、特別支援教育、インクルーシブ教育への理解を図った支援ニーズの有無に関わらず、どんな保護者にとっても、子どもの発達への理解につながっていったようであった。第4回は客観的な知識の習得というニーズに沿った講座であったが、障害についての理解が進んだこと、知識として知ることが出来たといった意見が自由記述に見られた」と語られている（田尻2016）。どのような意図を持ち、どのような「学び」の機会を保障するかは開催者の判断に委ねられるところであり、対象をどのように限定するかが、ニーズ合致度を左右するものであると考えられる。

また、わかりやすさという点について第2回の評価がやや低くなっているが「ああ、そういう人もいるのだと（中略）考えさせていただいた」という記述に見るように、理解が難しいというよりむしろ内容に共感しにくい部分があることが評価に影響したと考えられる。

第1回の講座については、アンケート自由記述にみるように、障害のある幼児を育て悩みの渦中にいる保護者に対し、ロールモデルとして将来への見通しを示したといえる。低出生体重児や多胎児の保護者支援としてピアサポートの有効性が知られているが、障害児の子育てにおいても「当事者」から情報や思いを共有することが有益であるとうかがえる。ピアサポートについては「情緒的サポートが特徴」（越智2016）といわれるが、自由記述の中にも「すっとんちと落ちた」「心に響いた」「共感できた」「いいですね!」「気持ちが入りました」等、心の動きを記述したものが散見した。子育て講座においても「当事者」からの語りが有効であることが確かめられた。

分析2では、自由記述の質的分析を行い、子育て講座の効果について検討した。「自己を肯定する」「自分の気持ちの整理」に関する記述が全記述数の4割以上（43.1%）を占め、多くの受講者が子育てについて何らかの不安や悩み、迷いをもち、「子育て講座」に足を運んでいると推測される。受講によりそれが多少とも軽減されれば、講座開催のねらいにかなったものとして評価できる。背景として、子どもを理解し子どもの立場に立った対応の仕方を具体的に知ることができたことがあるのではないかと。講座の効果として、母親の内面的な変化が検証されたことは意義深い。障害のある乳幼児を育てる保護者に対して、早期に適切な情報提供を行い、障害の理解や受容につながる機会となっていると考えられる。しかしながら、その後の子育てにどのような変化が見られるかについての追究は、その方法も含め、今後の課題である。

また、今回の講座は一部体験型ワークショップを含むがおもに講義形式であったこと、受講者は各回異なっていたことから、受講者の主体的学びや仲間づくりにはつながらなかったことがうかがえる。杉野（2010）の取組のように、連続講座として受講者の継続参加を基本とし、親子活動やグループワーク、実技等を含む講座の在り方も検討できる。養育者対象の「子育て講座」がどこにねらいを定めるかにより、内容にも工夫が求められるであろう。

岩田（1999）が述べているように「待ち」の姿勢だけでは、本当に支援を必要としている親子に支援が届くことはない。「子育て講座」はもちろん「相談」や「広場」に足を運べない親子にいかにも早期に介入の手立てを講じるかは、依然として課題である。

アンケートには「インクルーシブ教育について知りたい」「グループディスカッションをしたい」「父親講座をぜひ」等の希望もあり、養育者のニーズを精査して学習機会を設け、さらに有益な教育的支援につないでいく必要がある。

注1 本研究においては、超早期段階とは0歳から3歳未満段階を指している

文献

- 藤原義博：地域子育て支援事業『子育て応援団「連続講座」』に関する研究、藤原義博研究代表「超早期からの知的・重複・発達障害児の一貫した特別支援教育支援体制モデル研究」成果報告書、2016
- 広瀬健一郎：ワークショップ型子育て支援事業を通じた保育者養成教育実践の課題—保護者は「子ども講座」に何を期待し、何に満足したのか？—、鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要（18）、2012
- 岩田美香：育児困難の構造と類型、北海道教育大学教育福祉研究5、1992
- 金山美和子：男性の育児を促進する子育て支援の検討（3）、平成18年度児童文化研究所助成報告書、2006
- 神田雅貴：子どもの小学校入学を控える保護者を対象とした家庭教育講座の実施方法の考察、琉球大学生涯学習教育研究センター研究紀要（6）、2012
- 倉石哲也：学齢期子育て支援講座地域（短縮）版「PECCCK—Mini」の効果に関する研究：講座の効果測定尺度の開発と実施を通して、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、3（2）、2010
- 小林倫代：障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点、国立特別支援教育総合研究所研究紀要、第35巻、2008
- 宮田広義・主任研究者：地域における障害児の重層的支援システムの構築と障害児通園施設の在り方に関する研究報告書、平成20年度障害者自立支援調査研究プロジェクト、全国肢体不自由児通園施設連絡協議会、2009
- 越智祐子：ソーシャルサポートとしてのピアサポートに関する一考察—育児マイノリティの実践から社会的包摂を展望する—、名古屋学院大学論集社会学篇第52巻第4号、2016
- 佐野真一郎、池田信子：子育て施策としての「家庭教育講座」実施を考察する—子育て支援における保護者ニーズとは—、豊橋創造大学短期大学部研究紀要第32号、2015
- 笹瀬ひと美：子育て支援を受けて母親の子育て意識の変化—子育て支援講座後のアンケートからの考察、愛知江南短期大学紀要46、2016
- 杉野聖子：子育て支援における地域組織化活動—関係づくりを視点とした「子育て講座」の実践を通して—、大妻女子大学人間関係学部紀要、人間関係学研究12巻、2010
- 高橋幸子・田尻由起・森澤亮介・安部博志・若井広太郎・藤原義博・佐島毅・柘植雅義：特別支援学校における超早期段階からの知的・重複・発達障害児への支援の在り方（3）—「子育て講座」における教育的支援の検

討—日本特殊教育学会第54回大会発表論文集, p 12-9, 2016

田尻由起：地域子育て支援事業『子育て応援団「連続講座」』に関する研究、藤原義博研究代表「超早期からの知的・重複・発達障害児の一貫した特別支援教育支援体制モデル研究」成果報告書、2016

厚生労働省 次世代育成支援対策全般

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/jisedai/index.html

付記

本研究は、平成25年度から28年度に藤原義博を研究代表として取り組んだ「超早期からの知的・重複・発達障害児の一貫した特別支援教育支援体制モデル研究」（日本学術振興会科学研究費基盤研究B 課題番号25285258）の研究成果の一部を再構成したものである。日本特殊教育学会第54回大会での報告「特別支援学校における超早期段階からの知的・重複・発達障害児への支援の在り方（3）—「子育て講座」における教育的支援の検討—」（高橋・田尻・森澤・安部・若井・藤原・佐島・柘植2016）を高橋が加筆修正した。本稿作成にあたっては、田尻が調査データの整理・集計、藤原が全体監修を担当した。

（たかはし さちこ 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

（ふじわら よしひろ 創価大学教育学部児童教育学科教授）

（たじり ゆき 三鷹市総合保健センター、臨床発達心理士）